



# 「読書」にひそむ美味しい果実

— 松本清張著『砂漠の塩』を読む —

広島文化学園大学看護学部

深川 賢 郎

## ■ はじめに

読者によって、文学作品は様々な顔を見せる。読書会をしていると、このことが実感される。一般的にいて読み異なる感想が生じるのは、読者の持っている体験や知識によると考えられる。読む行為には、読み手の姿が敏感に反応する。

読書の楽しみは、著者の展開する物語を素直に受け入れるところから始まる。自分の内部に形成されるイメージを受け止め、味わうところにある。しかし、どんなに白紙の状態でも物語を受け入れようとしても、読み手のもっている特性、すなわち体験や知識、生まれながらにして持っている感性などの発揮する力の参入を完全に排除することは難しい。

読者が、自分の知識や経験などに影響される読みの姿について考えてみたい。方法として、一つを中心となる作品の読みを行い、その作品に他の作品を出会わせるという方法である。もとの作品の受け止め方が、別の作品に触れることでどのように変容するか、その変化を追ってみたい。この試みは、若い読者に「読書の持つ美味しい果実」に注目していただくきっかけとなることを期待しながらすすめたものである。

第一部で、松本清張著『砂漠の砂』を読む。第二部で、他の作品として、フローベル著『ボヴァリー夫人』を読み、二つの作品に登場するヒロインに焦点を当てる。第三部で、作品に対する読みの変化を考察してみたい。

本稿の執筆者の解釈や意見も入るので、テキストおよび資料の引用部分には、「 」をつけ、その末尾に掲載ページを示す。梗概を紹介する場合にも、文章の末尾に（ ）をつけ、掲載のページを示す。

## 第一部 松本清張著『砂漠の塩』を読む

### 1. 気づかなかった本心

野木泰子の母と谷口真吉の母とは、姉妹のように親しい間柄であった (p.50)。「泰子に、当時まだ生きていた父の、友人の息子との縁談があったとき、母が彼女の意思をそっと訊いたことがあった。相手のことではなく、真吉が好きなら、そのほうがいいんだけど、といった」 (p.50)。しかし泰子は「すぐ断った」。それは、「真吉とはあまりに近すぎた」こと、真吉と二人きりのときは、かえって冷淡になり、青春期になってから、その冷淡な見せかけは、いつものことになっていた。それが、大事な時に出てしまった。真吉の母がそのころ亡くなった。双方の母親が話しあうことができているならば、二人は結ばれていたかもしれない。父は、自分で縁談をすすめた (p.51)。

泰子は保雄と結婚する。泰子の中には、当初から迷いがあった。「なぜ、あのとき、すぐ、断ったのだ

ろうか。泰子のその後の後悔は、保雄との挙式の準備が進行しているときから始まった」(p.50)。結婚後間もなく泰子は「人生を誤った」と考えるようになっていた。保雄は実直で善良な性格であったが、泰子は、物足りなさを早くから感じていた。

結婚して二年経ったころ、「泰子は、真吉が『遊んでいる』という噂を聞いた」(p.52)。

後に、真吉は妙子という女性と結婚する。しかし、二人の間は親密ではなかった。

六年後に、真吉がたまたま泰子の母を訪ねてきた。泰子は呼ばれて母の家に行った。滅多にないことであるが、泰子は、真吉の帰りを送って、バス停までいく。バスを待っていた時間が五分くらいあった。そのとき、真吉は、泰子をN美術館に誘った(p.55)。翌日、二人は美術館で逢い、それまで伏せられていた二人の想いは現実のものとなっていった。

泰子にとっては、初めて知った恋である。保雄と結婚してからの泰子は、本心を抑え込んで「死んでしまっていた」。しかし、いま、「死んだはずの彼女が、真吉のかたわらに蘇生した」のである。この七年間、保雄はほとんど泰子の心に空虚な存在であった。泰子は真吉に心を移し、善良な夫に対する罪の意識にも目覚めた(p.62)。

許されない恋に二人は「死の旅」を考えるようになった。それは、秘密に逢うようになって半年後に決心された(p.11)。

このような経過を経て、二人は「死の旅」を考え始めた。「真吉はいつも泰子に不安をもっていた」。「これほど重大な決行が、彼女のすべてを得ないで成就できるかどうか。最後の結合が愛の強靱な紐帯になると男は信じている。泰子もそれを信じないわけではない」。泰子は、真吉から愛を確かめようとして強く「逼られて、崩れそうになったことも何度かある。その度に泰子の眼には保雄がよぎった」(p.11)。

泰子と真吉は、日本人のあまり行かない中近東への旅を企てた。誰もいない砂漠でひっそりと二人の死を迎えるためであった。泰子はヨーロッパへのツアーに参加し、フランスで団体から離れた。真吉は、急な旅に出て香港から退職願いを会社に送った。そしてアジア経由で西へ向かった。落ち合う地はエジプトである。

## 【解釈】

### 〔1〕泰子の拒否

二人は幼馴染で、兄妹のような関係になっていた。泰子には、異性としての真吉を考えにくかった。心の奥には恋心が存在していても、その逆を演じた。若い娘によく見られる現象である。真吉の方からも行動を起こさなかった。真吉は「遊び」に逃げている。それは、真吉の不満の表れだった。この間の事情は、泰子の父親の強いリードがあったこと、真吉の母が亡くなったことなどの背景がある。真吉の力の及ばないところで、話は進んだ。

### 〔2〕泰子の恋の復活

泰子は、自分が父のすすめた保雄との結婚を同意していることから、後で気づいた真吉への恋愛感情を抑え込むために、真吉への愛を封印した。そして保雄を愛しきろうと努力した。しかし、泰子の中に芽生えた真吉への「初めての恋」の力は強かった。泰子の中で膨らんでいく恋心は、「死んだつもり」で封印した決心を破って蘇えた。抑えれば抑えるほど、その反動として、真吉への想いは、強いものになっていった。

### 〔3〕二人の旅立ち

真吉も泰子も、間違ったスタートが尾を引いている。現在、二人にはそれぞれ伴侶があり、家族がある。泰子には、外から見るとこの上ない善良な保雄がいる。しかし、保雄に対しては、人間的な長所を感じながらも惹かれるものがない。泰子は、聡明な女性であるが、恋する真吉の存在が自分の中であって保雄を愛しきれなかった。

二人の愛が嵩じるにつれて、抑制の力は抗しきれなくなる。世間体や社会人としての倫理観からみて、真吉と泰子の恋は、解決への道が見えなくなってしまう。「死の旅」しか考えられないものとなっていった。

## 2. 「特別な神」の誕生

二人は、カイロで合流し、「死者の町」を観光する。その町というのは、裕福な人たちの死後の家（墓）の集合である。無人の家は番地を持った墓地であった。「死」を考える泰子は、そこで不気味な不安を抱いた（p.76）。

その夜、ホテルで泰子は考えた。「生きた人間のいないあの町には、闇の翼が降りるに違いない」。真吉は「生きている間は、二人だけのことを考えような」と言った（p.83）。

二人は、泰子の希望で別々に部屋を取っていた。外出から帰り、真吉が泰子と部屋の鍵を開けようとしている時だった。『おや奥さんじゃありませんか』。ホテルの廊下で、声をかける男がいた。保雄の大学時代の同級生、奥野であった。言い逃れできない状況だった。発見した奥野の方も「驚いて言葉を失い、狼狽した」（p.90）。

二十階もある大きなホテルで、滅多に日本人の来ないこの土地で、しかも、廊下を通り過ぎるという一瞬のこととして、この出会いはあまりに突発的であった。

「だが、彼に出会ったことが、泰子にこれからの一切の行動を決定付けさせた。彼女は、それを『神の摂理』と自分に言い聞かせた」（p.94）。「泰子の中にある神は、西方のそれとも違っていった。正体のわからない神は、ただ彼女に禁忌（タブー）しか教えなかった。寛大を拒絶したものだ。彼女の言う神は漠然としたものだった。それは、泰子が自分で作り上げたものだった。夫の友人の出現は、まるでその神が見せた厳しい意志の表れのようなだった」。奥野との出会いには「見えない絶対意志が働いていた」（p.95）。

泰子は、このことで一切が決まったと考えた。「これまで（保雄と）一抹つながっていた（天からの救いの）細い糸が切断されたのである。神の裁定であった」（p.95）

翌日、二人は、彼らに出逢うことを避けてカイロからベイルート行きの飛行機に乗った。

### 【解釈】

#### 〔4〕真吉の願い

カイロまで来て、二人は死を覚悟している。真吉は、この世でただ一人の恋人として、泰子の信頼を確かなものとしたかった。いまさら、泰子が保雄の存在によって、自分達の間に隙間を作ることへの不安があった。真吉は、愛に確信が欲しかった。けれども、泰子はそれを理解しつつも、身を許すことはなかった。

#### 〔5〕死者の町

「死者の町」は、無人の空間であり、遠い過去の死者たちの歴史を持っていた。不気味な雰囲気である。「あの町には、闇の翼が降りるに違いない」という印象は、以後の泰子の運命を支配する力を感じさせた。「闇の翼」は、救いのない死の世界である。泰子は、「死者の町」の不気味な静寂から不吉な恐ろしさを受け止めた。

#### 〔6〕奥野との出会い

奥野と出会ったことは、まったくの奇遇である。この事実は彼女を大きく変えさせる。日本との距離が一気に詰められ、泰子の中に、これまで遠く置き去りにしていた保雄との絆が生々しく噴き出してきて、自分の行為が強く咎められていることを知らされる。

この出会いは、保雄に対する彼女の裏切りが罰せられる「神の摂理」と受け止められた。「どこかに見えない絶対意志」が奥野を泰子の目の前に押し出したのだ。これを保子は神の意志と見た。この神は「特別の神」である。

「特別の神」は、「泰子の中にある神で、西方のそれとも違っていった。正体のわからない神は、彼女に禁忌（タブー）しか教えなかった。規律と掟だけの神だった。……」（p.95）。泰子は、この時点で、保雄に対する絶対的な罪悪感を刻み込まれた。この衝撃に、泰子は考え込んで二日間部屋に籠った（p.96）。

善良な保雄を裏切る行為は、自分の中の「神」によって、厳しく罰せられようとしている。「死者の町」で受け止めた「死」に対する不気味な不安と、「特別の神」の重圧は、泰子を責める。それでも、自分で自分を責めている間は、保雄に対する罪悪感をいくらか軽減するものを持っていた。しかし、奥野との

出会いを仕組んだ「神」の力は、泰子の中であって、天から垂れさがっている救いの糸を断ち切ってしまった。それでも、泰子の中には、保雄に対する細い一筋の糸がまだ続いている。

カイロからベイルートへ、二人はアラビア半島にわたる。

### 3. 目的地のない巡礼

二人はベイルートの空港に降り、「ここから彼との事実上の死の旅に上った」(p.98)。ベイルートからダマスカスへ、それは聖地に向かう巡礼の道だった (p.98)。巡礼の途上で迎える死が旅人にとって最も満たされる死であり、彼らにとってそれが本望なのだと真吉は言う。しかし、泰子の心は苦しかった。二人の逃避行は目的地をもたない旅であった。泰子の心には、まだ保雄に対する細い一筋の糸が続いていた。ダマスカスは世界最古の都市、泰子のなかで「昼間見た荒野の道は掻き消えることはなかった」(p.115)。その道は、パウロの歩いた道であった。ホテルの近くには、カインが弟を殺したという場所があった。

#### 【解釈】

##### 〔7〕巡礼の道

「巡礼の道」は、『聖書』の歴史を刻み込んでいる。カインが弟のアベルを殺し、追放された物語、そこには、カインが受けた永遠の「罰」が示されている。パウロは、イエス・キリストに教化された使徒で、ローマ帝国にキリスト教を広めた偉大な伝道者である。

「巡礼の途上で迎える死が旅人にとって最も満たされる死である」という表現は、神をたたえ、巡礼の旅に出る善男善女の上にもたらされる祝福を示している。しかし、真吉も泰子も互いに配偶者を裏切った「罪人」である。ヘブライの地は、「砂漠の神」の支配する地であり、二人は、「神の掟」に従わなくてはならない。泰子の保雄に対する罪の意識は大きく彼女の上に覆いかぶさってくる。

##### 〔8〕一筋の糸

「細い一筋の糸」は、泰子の心の中に引きずられている、保雄に対する彼女の良心から生まれる「絆」の意識である。泰子にその意識のあることは、自分の心のささやかな逃げ道でもあった。泰子は、「特別の神」の命令に反旗をひるがえそうとしても、保雄との細い糸を切ることができない。この迷いのために泰子の「旅」は、「わたしたちは、どこにどう近づいているの」(p.97・98)という行先のわからない不安と恐怖を抱かせている。

### 4. 黒い闇の出現

ベイルートについて二人はホテルに入る。泰子は真吉の求めを拒み続けた。それは泰子の中の「特別な神」によって持続されていた (p.134)。「保雄の底抜けな善良さが」彼女の中にその「神」を感じさせていたのである。「もっと保雄が、猜疑も、嫉妬も、横暴も、女への興味も世間並みに知っている夫だったら」泰子はそれほど苦しまなかったであろう。「世間の眼で見れば、彼女はすでに不倫を犯しているのであった」(p.135)。

ホテルでは、真吉は五階に、泰子は四階に部屋を取ることができた。自分の部屋に帰った泰子を不安が襲った。保雄を裏切り、異国の地で愛する真吉とも別々にいる孤独からくる不安だった。折しも、ホテルでは泰子のとなりの部屋で咳の聲がし、アラブ人がうずくまっているような気がした。妄想と強い不安が泰子を襲った。

そのとき偶然、真吉が部屋に入ってきた。『心配だったんだ』。真吉は言う『今度はぼくがここに朝までいるよ。そうしてもいいだろう?』『ええ』。『君は嫌がっているんじゃないのかな?』『望んでいるかもしれませんが』。言ってしまった瞬間、泰子は細々とつながっている夫との糸が切断されたと思った。切れた糸の両端は二つの白い筋に光って、その中間に真黒な闇があった」(p.139)。

『本当だね、本当だね?』『真吉は何度もうわずって念を押した。泰子の頬に涙が流れていた。真吉がその手をふいと彼女の身体から放したのは、彼女が、お母さま、と口走ったときだった。……真吉は倍以上の力で彼女を抱きしめた』。

「もう日本を振り向かないでほしい。ぼくたちは死に場所にゆっくりと愉しく歩くんだよ」。「泰子の中にあつた『神』が倒壊し、破戒が火花を散らした。深い穴の底に吸い込まれて起る風が鳴っていた。それから十日間、泰子と真吉の上に、退廃と、愉楽と、外界からの切断と陶酔がきた。二人は、次の夜から五階のおなじ部屋になった。……一切を投げ出した泰子は、かすかに残されている神に対して戦った。死の準備が二人の絶望的な愉楽だった」(p.140)。

二人が滞在しているホテルの、泰子の隣の部屋に泊まっていた人は、人目を避ける若い男女であった。その二人が銃で射殺された。二人は駆け落ちして、人目を忍んでいたのである。女はアラブ人、相手の男はスペイン人だった。暗殺者は、女の姦淫を咎める元の夫であつたらしい。異教徒との結婚を罰する行為だった (p.157)。

「あの女は、邪宗徒の嫁になるなという禁忌と、姦通という法度の、アラーの二重の立法に背いたのです」(p.161)。ホテルの支配人は言った。「あなた方は、(あの) 女が姦通していたことを考えるべきです。姦通した女は、アラーから二倍の罰をうけなければなりません」(p.162)。支配人は、コーランの「焰の立法」を引用しながら話した。

「泰子は真っ青になった」(p.162)。

## 【解釈】

### 〔9〕 泰子の本心

泰子は、自分の部屋に一人でいることに不安を募らせていた。それは、隣の部屋から押し寄せる不気味な恐怖と、孤独から来るものだった。彼女の内心は、いつの間にか真吉をもとめ、渴いていたのである。真吉に抱きしめられたとき「お母さま」と口走っている。母親からの巣立ちの声とも取れる。保雄との細い糸を切るための許しを求めた声かもしれない。このとき、泰子は、自分の一切を捨てた気持ちで、真吉に飛び込んだ。そして、「泰子は、かすかに残されている神に対してたたかった」(p.140)。

### 〔10〕 神の倒壊

この「神」は、保雄の善良さから生まれる神である。それが泰子を責めている。真吉のことを「もうこの人しか自分にはいないのだという強い実感」を抱いたとき、泰子の中でこの「神」は「倒壊」していった。この瞬間から、泰子は、アラーの神の「罪人」となった。泰子は、それでも保雄のことを完全に切り捨てたのではなかった。が、真吉に対する決断の時が来たという思いでいっぱいであった。

### 〔11〕 若い男女の殺害

密かに隠れていた二人連れの若い男女が銃殺されたことは、泰子に改めて恐ろしい「罪」の意識を自覚させた。ホテルの支配人の言葉は、暗に泰子の「破戒」とがめる厳しさを裏付けるものとなった。真吉と泰子の前途には、さらにアラーの「罰」が待ち受けている。泰子は、自分たちが、保雄や妙子(真吉の妻)から「復讐を受けていると思った」(p.166)。この二人も自分たちの罪を裁く側にいる人々である。真吉と泰子は、さらに逃亡する。

## 5. 最後の旅

そのころ、日本では、真吉と泰子の旅が、周囲の人にとって偽りのものであったことが知られ始めていた。何も知らなかった保雄は、泰子のイタリアでの楽しい旅を想像し、自分でも愉しんでいた。奥野は、直接保雄に彼の妻の真実を告げることはしなかった。しかし、妙子には会社から連絡があり、真吉の辞表が上海から送られてきたことが告げられる。このことは、泰子の母親の知るところとなり、保雄も二人の旅の真実を知った。

保雄は、直ちにバイルートに向けて発った。

一方、真吉と泰子の二人は、バクダッド行きバスに乗る (p.210)。そのころ体調不良であった真吉がバスの中で高熱を發し、ルトバで下車する (p.276)。ルトバは、バクダットまでの中間点に当たる。真吉は、急性肺炎を發症して寝込んだ。ルトバには、まともな医師もマイシンも酸素吸入設備もなかった。泰子は、自家用車で旅をしている人の車に便乗させてもらい、バクダットに行く。医師と看護婦を連れて帰る。真吉は命を取り留めた。医師からは、五、六日で回復すると言われた。

医師がバクダットに帰ったあと、医師の指示で補充用の酸素ボンベを届けるために使いの男が来る。男は、泰子に「ダマスカスからベイルートへ向かう日本人紳士が自動車事故で大けがをした」ことを話す。

交通事故の被害者の日本人というのは、二人を追いかけている保雄だった。二人は、人を通じてそれらしい事実を知った。

「泰子は、雷に打たれたようになった」(p.325)。

「保雄の追跡がはっきりとなった。日頃の保雄には考えられないことであった」(p.329)。

「泰子は、保雄が死なないでいてほしいと祈った。……こう考えたとき泰子は愕然となった。保雄が妻(泰子)の名を呼んでいるに違いないと気付いたからである」(p.331)。

真吉も、懊悩しながら、泰子に保雄の看護に行くことを提案した。しかし、内心では泰子が保雄のもとに駆けつけることを恐れていた。「とても行けないわ」と泰子は微笑を見せた。「その微笑を意識したとき、泰子は、自分の中に住む悪魔を知った。……どう言ったら、保雄の前に出られますの?」「真吉が顔をゆがめた」(p.332)。

「もう死んでるかもしれないわ」と、泰子は、自分でも思ってもみなかった言葉を吐いた(334)。「びっくりなさっているようね。わたしは、あなたに遠慮してこんなことを言っているんじゃないありません。わたしには、もう、あなたしかいないの。そのほかのことは何も考えていないんです。わたしの頭の中は空っぽだわ。わたし自体が、あなたの中でしか呼吸のできない虫ですわ」(p.335)。そう言いながら、泰子は涙をながした(p.336)。二人は急いでルトバを発たなければならない。日本大使館から保雄の妻を探しに来るかもしれないからである。

次の日、バクダットに向けて、二人はバスに乗った。そして、砂漠の路の途中で二人は、忘れ物をしたという口実を作り、バスを降りた。日没となり足場の悪い砂漠の中を歩いた。道路から遠ざかり、砂漠のくぼんでいる「涸谷(ワジ)」に入った(p.350)。やがて夜が明け始める。二人は、ここを死に場所と定めた。

二人はそこで最後の愛の確認をした。泰子の髪に砂が入り、キャメルソーン(ラクダの棘)が、泰子の顔に当たった。それから、二人は薬を飲んで死の到来を待った。

\*

そのころ、日本の海外協力の調査隊が、砂漠に水を引くための地質調査を続けていた。調査隊は、作業の途中で「涸谷(ワジ)」に倒れている二人の男女を発見した。

〔イラン・イラク地質調査隊員森本誠の手記〕は、次のような報告をしている。

「男の方は絶望だが、夫人は心臓が動いている。……婦人は二時間後に昏睡からさめた」(p.359)。男は火葬にされた。執拗に死を望むY女の自殺も考えられたので、調査隊は、イランで活動していた国連の看護婦、大津恵美子の派遣を求めた。やがて、Y女は、大津恵美子に信頼を寄せるようになった。大津恵美子は、調査隊長あてに次のような電報を打っている。Y女は「ベイルートの病院にいる日本人重傷者が彼女の夫であることを告白。謝罪した上、正式に離婚を求め、また、もし彼が許すならば早く看護したいと希望した。私はそれを承諾した。……彼女が到着したとき、その夫はその前夜、懊悩と孤独に耐えかねて、病室でひとり縊死していた。Y女は未だにわたしのもとには戻ってこない。彼女の恋人の遺体を焼いた場所に捜索隊を出したい」(p.312)。 \*『砂漠の塩』はここで終わる。

## 【解釈】

### 〔12〕何も知らなかった保雄

善良な保雄は、妻の旅を想像し、ローマで楽しんでいる泰子の姿を心に描いて、自分でも楽しんでいる。妻の喜びをわが喜びとする保雄であった。

### 〔13〕日本人紳士の自動車事故

事故に遭った日本人が「保雄に違いないと直感的に泰子は確信した」。このことは、泰子の中に、保雄への意識が持続されていたことを示している。泰子の中の「神」は倒壊してはいたが、保雄の大怪我は、つらい情報であった。あのホテルの支配人の言った『姦通した女は、アラーから二倍の罰をうけなければなりません』という言葉は、殺された「外国人」に向けて言われたものであるが、いまは、泰子に向

けられた言葉となっている。

#### 〔14〕 泰子の告白

泰子の裏切りが、保雄に交通事故の巻き添えをもたらし、命を奪おうとしている。この事実は、泰子にとって大きな負い目であり、その罪悪感は尋常なものではない。泰子は真吉のいう、「看護に行つては」という提案を断りながら、保雄につながる糸を否定しかねている。そのとき、彼女は「自分の中に住む悪魔を知った」。泰子が真吉に心を寄せることは、自分の中の悪魔を受け入れることである。

「もう死んでるかもしれないわ」という泰子の言葉は、保雄の死を予測する言葉であるが、それまでの泰子の心情とは、大きくかけ離れている。この背景には、真吉との愛を成就させたいという願いがある。そして、真吉に「私には、あなたしかいない」という決意も表している。しかし、自分の言葉とは裏腹に保雄への細い絆が、いまでも潜んでいる。死を予測する言葉は、泰子が自分の心の奥底にある保雄への迷いをふっ切ろうとする必死の声である。泰子のなかの悪魔がささやかせる思いがけない言葉であった。

#### 〔15〕 砂漠に横たわる二人

バスから降りた二人は、砂漠にはいっていった。誰にも知られないところで死ぬ覚悟であった。しばらく歩いて、二人は、干からびた涸谷（ワジ）に横たわった。真吉の愛撫を受け「泰子は苦痛と恍惚に耐え、最後の、確かな生命の証に陶醉した」。この場面は、泰子の「命」の究極の願いを実現している。キャメルゾーン（ラクダの棘）で、泰子は顔に痛みを感じながら、生命の確信に陶醉した。

#### 〔16〕 救助された泰子

二人が死を決行した翌日、イラン・イラク地質調査隊のメンバーが、二人を発見した。真吉は死亡しており、昏睡状態にあった泰子は、治療を受けて蘇生する。泰子はイランで活躍していた国連の看護婦、大津美恵子の管理下に置かれた。

この場面から、文章は調査隊の報告となり、二人の姿は遠景として描かれる。そのために、これ以後、泰子の詳細な心情は述べられていない。

自殺に憑かれている泰子に、保護のため大津恵美子が付けられる。この措置は、死ぬことを許さない「砂漠の神」の意思が背後にあることをうかがわせる。

泰子は、大津恵美子に心を許し、これまでのことを話すようになる。それは、保雄に謝罪し、正式に離婚をもとめること、ゆるされることなら保雄の看護を申し出たいという希望であった。保雄への贖罪の思いからである。大津恵美子は、この願いを受け入れる。

#### 〔17〕 保雄の自殺

泰子が、保雄のいる病院に「到着したとき、その夫は前夜、懊悩と孤独に耐えかねて、病室でひとり縊死していた」。保雄は、大怪我をしても『誰も呼んでほしくない』と言っていた。自らの死をもって抗議する保雄の自殺は、強い復讐を含んでいる。

この原因は泰子にある。泰子の贖罪の行為も、保雄の死によってその機会を絶対的に封じられた。泰子は、救いのない罪人になってしまった。保雄の思い切った行動は、彼の判断というより、アラームの掟、「砂漠の神」の裁定を感じさせる。

#### 〔18〕 Y女の行方不明

大津恵美子から調査隊の隊長にあてた電報には、次のことが記されている。「Y女は、未だにわたしのもとには戻ってこない。彼女の恋人の遺体を焼いた場所に捜索隊を出したい」。

泰子は、保雄の自殺に直面し、自分の「罪」が償うことのできないことを自覚する。自分も死をもって償わなければならない。死を決行する場所は、真吉を火葬にしたあの砂漠しかない。死んで真吉と一つになるためである。

一方、大津恵美子は、泰子の心理を予測した。彼女は、恋人を火葬にした場所に行くに違いない、と。それで大津恵美子は、現地に捜索隊の派遣を要請したのである。

大津恵美子の所に泰子が帰らないのは、大津恵美子が泰子の命を握っているからである。泰子は、真吉の遺体が火葬にされた所に行きたい。しかし、そこには、大津恵美子の手配した人が待っているに違いない。聡明な泰子はこのように考えたであろう。

泰子は、不毛の砂漠に入るしかない。凄絶な砂漠の中を、一人で彷徨し、肉体の死がやってくるのを

待つのである。

『砂漠の塩』は「神の呪い」を意味している<sup>1)</sup>。ここに、松本清張の構想が込められている。「死者の町」で見た不気味な「黒い翼」は、泰子を暗黒の世界に導く予告であった。泰子は、アラーの「塩の掟」に従うことしかできない。それは、カインの受けた永遠の罰とおなじように、際限のない砂漠の旅をすることを意味している。

## 第二部 フローベル著『ボヴァリー夫人』との併せ読みの試み

上記、第一部は、一般的に読まれるであろうと考えられるところを、できるだけ表現に即して読み取ったものである。

この作品に対して、フランス文学のフローベル著・生島遼一訳『ボヴァリー夫人』（新潮文庫）、を取り上げ、ヒロイン「エマ」の「生き方」と対比して「泰子」を読んでみたい。

\* 『ボヴァリー夫人』に見られる表現の掲載ページには「ボ」をつけて示す。

エマは、歯科医師ボヴァリーの若い妻である。

修道院を下がったエマは、歯科医師のシャルル・ボヴァリーと結婚する。エマは恋を夢見る女であった。結婚したのちにも、夫に詩を書いて見せたり、恋愛の雰囲気醸し出すためのアピールをする。が、仕事に没頭するシャルルは、善良ではあったが、彼女の期待する反応を示さなかった。エマは、「ああ、なぜ結婚なんかしたのだろう」（ボ p.59）とつぶやいている。結婚していても、彼女は夫と恋をしていたかったのである。

泰子は保雄との結婚生活に、善良で申し分のない夫であることは認めていたが、真吉に感じるような魅力を受け止めることはできなかった。泰子は、「人生を誤った」と考えている。このことは、エマと共通するところである。

飽き足りなくなったエマは、「たえず夢を見つづけ、何かを待った」（ボ p.82）。彼女の心は、次のように述べられている。「女の意志は、被っている帽子のひもで止めたバールのようにひるがえる」（ボ p.115）。と。エマは、夢見る世界にあこがれ、自分を縛っている帽子のひもの下で、心だけは自由にひるがえって、何かを求めているのであった。

心ゆらめくエマは、不倫の恋に走る。彼女の相手は多い。レオン（プラトニックラブの相手、別れたのち再会する）、ロドルフ（遊び人で、エマは身を任せるが、エマとの駆け落ちをすっぽかす）、ルー（エマは高利貸しの術中にはまって、散財と情事を重ねる）、などである。彼女の異性との交渉は、華やかに展開する。こうして、エマは自分の欲望を満たすことはできた。しかし、乱脈な恋は、彼女を破滅に追い込んでいった。行き詰ったエマ、最後は、毒（ヒ素）を飲んで苦しみ、呪いの声を吐きながら死んでいく。

死のベッドのほとりで、彼女を慰めたのは、夫のシャルルであった。シャルルはエマに声をかけた。「おまえは幸福じゃなかったのかい？ ほくがわるかったのかい？ ほくはできるだけことはしたつもりだった」（ボ p.446）。

これは、泰子がエジプトにいたとき、保雄が日本で描いていた夢に似ている。泰子は、夫を裏切って真吉と情死の旅に出ていた。それを気付かなかった保雄は、泰子がイタリアでの旅を楽しんでいることを想い、自分でも幸せを味わっていたのである。

エマは、自分の中から呼びかける欲望のために振り回され、罪の意識を抱くことはなかった。恋の陶酔と快感が、彼女の求めつづけた世界だった。

参考として、松沢和宏著『『ボヴァリー夫人』を読む』（岩波書店）のコメントを取り上げてみよう。この書は、『ボヴァリー夫人』を研究者の立場から分析したものである。これによると、「エマには、篤い信仰心は言うに及ばず、およそ分析や反省といった批評精神の片鱗もうかがわれない」（松沢 p.53）人物とある。エマは、泰子の抱く「罪」の意識とはまったく異なった思考スタイルを持っている。同書には、次の指摘も見られる。「情事や派手な趣味のために借金を重ねて、返済できなくなったエマが、レオンに、暗に事務所の金を盗むような犯罪を教唆した。そのために、レオンは恐れをなして逃げる。エマにとって、



シャルルを含めて三人の男はいずれも幻を投影した、色褪せたコピーに過ぎず、取り替え可能な、かりそめの対象でしかなかった」(松沢 p.59)。

エマは、恋愛の幻想におぼれ、自らの夢の中に埋没していたのである。

松本清張は、あるいは、『ボヴァリー夫人』を読んでいたのかもしれない。泰子のような、自分の中に棲む「良心」と、女性としての「願い」の板挟みに生きる主人公を想定し、フランス文学の「エマ」とは、まったく異なる人物を策定したことも考えられる。

こうして『ボヴァリー夫人』の生き方をベースにして『砂漠の塩』を読んでもみると、『砂漠の塩』の泰子は、別の顔を見せる。

泰子は、現実を受け止め、自らの「罪」を責め、「砂漠の神」の掟に怯えている。保雄に向けられる「細い絆」、夫との道徳の糸も最後まで保ち続ける。それでいて、自分に「命を吹き込んでくれる真吉」に飛び込んでいった。そのとき、泰子は、自分の中に悪魔を見る。自分の考え方や、行為は、自分の中に棲む悪魔の仕業であることを気付いている。エマは奔放であった。罪の意識もなく、悪魔の命ずるままに自分の恋にのめり込んでいった。

泰子にきざした「悪魔」は、アラールの神の支配する中近東の地において得られたものである。中近東の舞台は、このために必要であった。

泰子の、自らの心に忠実に生き、「掟」を乗り越えようとする姿には、さわやかで清澄な「生き方」と、人としての強い「倫理観」がかえって浮き彫りとなる。

### 第三部 読者の中に生じる果実

第一部でみてきたように、『砂漠の塩』で、松本清張が描いた内容は、罪におびえる真吉と泰子の二人の恋とその姿であった。主人公の泰子に焦点化して読み込んでいくと、悲惨な罪人としての泰子の苦悩と哀れな姿が印象に残る。

松本清張が採用した作品の背景には、中近東の歴史にはぐくまれた砂漠の「塩」がある。「塩」の歴史の意味するものは、「神の呪い」である。泰子の受ける心の重圧は、始め道徳上の罪悪感に対する意識であった。しかし、中近東を舞台とすることによってアラールの呪いが加わってくる。さらに、自分の中に棲む「悪魔」も現れている。

これだけの条件を備えた背景は、泰子の愛の実現を厳しく阻む効果をはらんでいる。そのために、読者は、運命の力に打ちしおれる泰子の不幸を重く受け止めることになる。悲劇のヒロインとしての泰子が印象に残ってしまうのである。

しかし、すでに見てきたようにフローベルの描くエマの前に泰子を据えると、泰子は、罪に苦しむだけの人物ではなくなる。

泰子は、自分の意志で自分の人生を堅実に生きた。苦しみの中に彼女の「良心」を貫く姿が見える。自らの存在を凝視し、闘うべきものと対峙している。そこには、主体者としての堂々と自分の人生を実践している姿が見える。彼女の死は、絶望の果てのものではなく、目的を実現するための闘いの結果としてもたらされた。

松本清張は、「泰子と真吉」の運命を、スリルとサスペンスに富んだ興味深い作品として描いたのかもしれない。二人の人生行路を描くことで、読者をひきつける物語世界を演出したのだろう。しかし、他の作品(あるいは読者の体験や知識)を加味して読むと、そこには泰子の別の生き方があぶりだされてくる。『砂漠の塩』という作品だけを読んだのでは発見しにくい「泰子」という人間の持つたくましい生き方が浮かんでくる。

このように、読者の持っている特性(経験と知識)は、個性的な読みを生みだし、作者の期待していなかった意味を展開する。読書に親しむ習慣のない人は論外として、読書好きの人であっても、作品の展開を楽しむだけの読書では、もの淋しい。そのような読書も、それなりの価値がないわけではない。しかし、文学作品を味わう本来の成果とは遠い。

教養のための読書は、「娯楽の読書」、「実用の読書」とは違って、読者のもつ特性と作品のもつ力とが

ぶつかり合って、第三の世界を生み出すところにある。

これこそが、読者の主体性において摘み取ることのできる文学作品の果実ではないか。

### 〔追記〕

読書活動は、自分と作者との、ある種の格闘技と言えるかもしれない。このバトルによって、私たちの精神は耕され、研ぎ澄まされ、そして高められていく。そのために、読者の持つ特性（経験と知識）が重要となる。「鐘も撞木（しゅもく・鐘を突く木材）の当たりよう」という言葉がある。これは、対人関係を言ったものであるが、作品と読者の関係にも当てはまる。読者が、どんな力で作品という鐘を突くのか、それによって、見えてくる景色は変わる。読書離れは、この貴重な経験を細く痩せたものになっているに違いない。

読書活動は、活字をイメージに換え、著者の表現を自分の内に描き出す高度な精神活動である。読者は、自分の言葉で作品を受け止め、独自の世界を創造する。こうした体験を重ねることによって、私たちの心は育てられる。

そのとき、自分の内から湧き上がってくる「感動」だけが、自らの持つ堅い殻を突き破る力を持っているといわれる。この営みによって新しい自分を育てることは、第三者が外部から手出し出来ない。「文学」は、このために存在している。

人間をしっかりと描いた作品、この作品と自分の生き方とを格闘させて読む「読書」は、いま開花しようとしている人にとって、あるいは望ましい自己成長を求める人にとって、欠かせない体験となるであろう。この営みが感性を育み、しなやかな人間性を育てる。看護師から患者に向けられる優しい“まなざし”や“ほほえみ”、“患者に寄り添う心”は、多くの人の好む言葉であり、姿である。しかし、その内実は、知識や技術だけでは足りなくて、こうした「読書」という心の鍛錬を補完することによって、さらに磨かれていくのではないだろうか。

(JPIC 読書アドバイザー)

2015. 7. 24記

### 採用した図書

- 1) 松本清張著『砂漠の塩』新潮文庫 平成25年5月5日刊
- 2) フローベル著・生島遼一訳『ボヴァリー夫人』新潮文庫 平成16年9月25日刊
- 3) 松沢和宏著『『ボヴァリー夫人』を読む』岩波書店 2004年10月20日刊

### 注

- 1) ミシェル・フイエ著・武藤剛史訳『キリスト教シンボル事典』クセジュ文庫（白水社・2006・10刊）によると、「塩」には四つの意味がある。その一つとして『塩は土地を不毛にするし、潮の混じった水は人の渴きをいやさない。そうした意味で、塩は神の呪いを表す』という解釈がある。松本清張著『砂漠の塩』の「塩」は、この意味を踏まえたものと受け止めるのが妥当であろう。中近東の砂漠は、雨量の問題というよりも、塩害の要素が大きい。「塩」は、古代の人々を支配する絶対的な力を持っていたようである。